『印度学仏教学研究』参考文献書式についての注意事項

2015.7.20 作成　9.20 改訂
2016.9.3 改訂

『印度学仏教学研究』執筆に際して，一次文献および二次文献の記述については以下の書式を参考にしてください．

総則

- 二次文献一覧（参考文献表）は和文，欧文を問わず末尾に必ず掲げ，論文にて言及したものを挙げる．
- 一次文献一覧（略号表を含む）と二次文献一覧（参考文献表）の両者を掲げる場合，原則として両者を区別して記述する．
- 一次文献の書誌情報は注であれ表であれ，必ず一度は記述する．略号を用いる場合には必ず対応関係を明確にする（大正新脩大蔵経などの特定の叢書類に収められているものを除く）[1]．なお，一次文献の書誌情報を注で明記した場合には，改めて末尾に再掲する必要はない．
- 一次文献は特定の叢書類に収められているものを除いては，刊本名，編者名，出版地，出版社，出版年を挙げる．なお，和漢書の場合には出版地を記載する必要はない．

  （例）〈注〉*Tattvasaṅgraha of Śāntarakṣita with the Commentary of Kamalaśīla*, ed. Embar Krishnamacharya, 2 vols., Gaekwad's Oriental Series, nos. 30, 31 (Baroda: Central Library, 1926)

  〈略号表〉*Tattvasaṅgraha of Śāntarakṣita with the Commentary of Kamalaśīla*. Ed. Embar Krishnamacharya. 2 vols. Gaekwad's Oriental Series, nos. 30, 31. Baroda: Central Library, 1926.
- 雑誌名の略称は『印度学仏教学研究』のみ可とする．
  ・和漢表記は『印仏研』とする．
  ・ローマ字表記は *IBK* とする．
- 二次文献の記述項目は次のとおりである．（ ）内は原資料に記載がなければ記述の必要はない（初版については特に記載する必要はない）．

  〈和漢書籍〉

  著者名，書名，（版），（シリーズ名），（巻数），出版社，出版年

[1] 特定の叢書類については，末尾の補遺 1 参照．

〈和漢論文集〉

著者名，論文名，（編者名），収載書名，（版），（シリーズ名），（巻数），出版社，出版年，頁数（横組みの場合）

〈和漢雑誌論文〉

著者名，論文名，雑誌名，巻号，刊行年，頁数（横組みの場合）

〈欧文書籍〉

著者名，書名，（版），（巻数），（シリーズ名），出版地，出版社，出版年

〈欧文論文集〉

著者名，論文名，収載書名，（編者名），頁数，（版），（巻数），（シリーズ名），出版地，出版社，出版年

〈欧文雑誌論文〉

著者名，刊行年，論文名，雑誌名，巻号，頁数

- 欧文において和漢書等の書誌情報を記載する際には，ローマ字表記と原語を併記する．ただし，出版地と出版社の原語を記述する必要はない．なお，カタカナ表記は英語やサンスクリット等の原綴に変換せず，そのままローマ字で表記する[2]．

（例）Iwamoto Yutaka 岩本裕. 1957. “Sansukuritto bungaku ni okeru Bukkyō (1)” サンスクリット文学に於ける仏教 (1). *Indogaku Bukkyōgaku kenkyū* 印度学仏教学研究 5 (2): 20–25.

（例）Tsuji Naoshirō 辻直四郎. 1943. “Yājunyavarukiya o megurite” ヤージュニャヴァルキヤをめぐりて. *Shūkyō kenkyū* 宗教研究 5 (3): 1–30.

（例）Misaki Ryōshū 三崎良周. 1989. “Godaiin Annen ni okeru Taimitsu no taikei” 五大院安然における台密の体系. *Nihon Bukkyō Gakkai nenpō* 日本仏教学会年報 54: 137–154.

- 論文名については，和文表記の場合は「 」で括り（欧文に付せられる原語を除く），欧文表記の場合は“ ”で括る．
- 書名・雑誌名については，和文表記の場合は『 』で括り（欧文に付せられる原語を除く），欧文表記の場合はイタリック体とする．また，一次文献として用いる典籍名についても同様とする．

（例）Arai Keiyo 新井慧誉. 1998. “*Daihō bumo onjūkyō* kōi”『大報父母恩重経』校異. *Buzan gakuhō* 豊山学報 41: 1–41.

細則

[2] ローマ字表記の方法については，末尾の補遺 2 参照．

書誌情報における各項目についての注意事項を列挙する．句読法等については，記載の実例に従って記述する．

題目

- 和文においては，和漢の書名および雑誌名に『 』を付し，洋書名および洋雑誌名はイタリック体とする．欧文においては，いずれの場合もローマ字表記をイタリック体とする．
- 和文においては，和漢論文タイトルに「 」を付し，欧文論文タイトルに“ ”を付す．欧文においては，いずれの場合もローマ字表記に常に“ ”を付す．
- 英語書名および論文名はヘッドライン方式（名詞・代名詞・動詞・形容詞・副詞の語頭を大文字）とする（原資料がセンテンス方式で記載されている場合は適宜変更する）．また，英語以外の場合には当該原語の正書法を優先させつつセンテンス方式（冒頭と固有名詞以外は小文字）とする．なお，日本語等非ローマ字言語のローマ字表記は，対応する英語表記が大文字で開始するものを除いて小文字で記述する．また，洋書等におけるフルキャピタルをそのまま記載する必要はない．

  （例）Chemparathy, George. 1968–1969. “Two Early Buddhist Refutations of the Existence of Īśvara as the Creator of the Universe.” *Wiener Zeitschrift Kunde Süd- und Ostasiens und Archiv für indische Philosophie* 12/13: 85–100.

  （例）Frauwallner, Erich. 1952. “Die buddhistischen Konzile.” *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 102: 240–261.
- 副題は和漢書名・論文名の場合には二倍ダーシで囲み，洋書・欧文論文の場合にはコロンで主題の直後に続ける．コロンを用いる際，主題の末尾がクエスチョンマーク（?）やエクスクラメーションマーク（!）で終わる場合（書名等の末尾に含まれる場合を除く）には，コロンを付す必要はない．また，副題は独立した文と考え，冒頭の文字は大文字とする．

  （例）Krasser, Helmut. 2004. “Are Buddhist Pramāṇavādins Non-Buddhistic? Dignāga and Dharmakīrti on the Impact of Logic and Epistemology on Emancipation.” *Hōrin: Vergleichende Studien zur japanischen Kultur* 11: 129–146.

  ※原資料の副題がピリオドで結ばれている場合，およびダーシで結ばれている場合も原則としてコロンに変更する．
- 欧文論文の書誌情報を記述する際，雑誌名や書名に関して原題以外の英訳等の翻訳がある場合，翻訳ではなく原題を記載する．すなわち，和名を有する日本発行の雑誌に収められる欧文論文を記載する場合は，和名雑誌の原題を記載する．例

えば『印度学仏教学研究』の場合には，英訳名 *Journal of Indian and Buddhist Studies* を用いるのではなく，『印度学仏教学研究』と記述する．

- 雑誌を除く論文集，ないし書籍の特定の章等を参考文献として記載する場合，当該の書籍名も記載し、編者が記載されている場合には編者もあわせて記載する．欧文論文等においては，書名の前に “In” と記載する．

  （例）Bhattacharya, Kamaleswar. 2000. “A Note on *viṣama upanyāsaḥ*.” In *Harānandalaharī: Volume in Honour of Professor Minoru Hara on His Seventieth Birthday*, ed. Ryutaro Tsuchida and Albrecht Wezler, 33–37. Reinbek: Dr. Inge Wezler, Verlag für Orientalistische Fachpublikationen.

  ※シリーズ名として独立させるか否かは，書誌の構造に応じて適宜判断する．

  （例）桜部建 1974「原始仏教・アビダルマにおける存在の問題」三枝充悳編『講座仏教思想 1 存在論・時間論』理想社，17–54.

  （例）池田澄達 1944『マハーバーラタとラーマーヤナ』東洋思想叢書 14，日本評論社.

- 題目に「 」が含まれる論文の書誌情報を欧文論文にて記述する場合，「 」をシングルクォーテーションマーク（‘ ’）に変更する．

  （例）Kasai Tadashi 笠井貞. 1975. “Hēgeru no ‘gaisuto’ to Dōgen no ‘kokoro’” ヘーゲルの「ガイスト」と道元の「心」. *Hikaku shisō kenkyū* 比較思想研究 2: 138–141.

編著者名

- 編著者名は原資料にしたがって記述する．イニシャル表記は原資料にある場合に限り，任意にイニシャル表記に変更しない．また，原資料のイニシャル表記に補記を加えてフルネームを記述する場合にはブラケットを使用する．

  （例）Staal, J. F[rits]. 1973. “The Concept of *Pakṣa* in Indian Logic.” *Journal of Indian Philosophy* 2: 156–166.

- 編著者名にはスモールキャピタルを用いないものとする．
- 日本名のローマ字表記は姓・名の順とし，フルキャピタルを用いない．欧文原資料の記述が〈ファーストネーム（名）　ファミリーネーム（姓）〉となっている場合，〈ファミリーネーム（姓），ファーストネーム（名）〉の形式に統一する．ただし，原資料の記述が〈ファミリーネーム（姓）　ファーストネーム（名）〉の形式となっている場合には，“,” を記す必要はない．
- 欧文論文等における編著者名の漢字表記は，原資料の論文に漢字表記の記述がある場合に限り必須である．当該資料に漢字表記がなければ，それを記す必要はない．

- 二次文献表において同一著者による洋書・論文が複数並立する場合，二つめ以降の著者名部分には em-dash を三つ重ねる．さらに，同一出版年の文献が並立する場合には，年号の後に “a”，“b” 等を付す．また，縦組み論文の場合にはダーシを用いずに、著者名を繰り返すものとする．

  （例）Vetter, Tilmann. 1992a. “On the Authenticity of the Ratnāvalī.” *Asiatische Studien* 46: 492–506.

  ———. 1992b. “*Pāramārthika-pramāṇa* in Dharmakīrti’s *Pramāṇa-viniścaya* and in Gtsang-nag-pa’s *Tshad-ma rnam-par nges-pa’i ṭi-ka legs-bshad bsdus-pa*.” In vol. 1 of *Tibetan Studies: Proceedings of the 5th Seminar of the International Association for Tibetan Studies, Narita 1989*, ed. Ihara Shōren and Yamaguchi Zuihō, 327–333. Monograph Series of Naritasan Institute for Buddhist Studies Occasional Papers 2. Narita: Naritasan Shinshoji.

- 「著」「稿」等の役割を表記する必要はない．ただし，編集や翻訳等の場合には「編」「訳」ないし “ed(s).”（editor(s)），“trans.”（translator(s)）等と付す．また，洋書の論集の場合には，書名の直後に “ed.”（edited by）として編者を挙げる．

  （例）山口益訳注 1966『安慧阿遮梨耶造 中辺分別論釈疏』復刊叢書 8，鈴木学術財団．

  （例）Johnston, E. H., trans. 1932. *The Saundarananda, or Nanda the Fair*. Panjab University Oriental Publications, no. 14. London: Oxford University Press.

- 編著者名が四人以上に及ぶ場合，和漢書名・論文名を記述する際には「他」とし，欧文書名・論文名を記述する際には “et al.” とする．

  （例）早島鏡正他 1982『インド思想史』東京大学出版会．

  （例）Nagatomi, Masatoshi. 1980. “*Mānasa-pratyakṣa*: A Conundrum in the Buddhist *Pramāṇa* System.” In *Sanskrit and Indian Studies: Essays in Honour of Daniel H. H. Ingalls*, ed. M. Nagatomi et al., 243–260. Dordrecht: D. Reidel Publishing Company.

- 雑誌の編者名を記載する必要はない．

出版地・出版社・出版年

- 出版地は原則的に都市名を記載する．和漢書の場合には出版地を記載する必要はないが，洋書の場合には必須とし，特に後者の場合は〈出版地: 出版社〉という形式とする．なお，出版地不明の場合には “n.p.”（出版社が判明している場合）ないし “s.l.” と記述し，推定される出版地を記す場合にはブラケットを用いる．

- 出版地が複数ある場合には，最初のもののみを記載し，複数の出版地を“and”やハイフン等で結ばない．
- 雑誌の発行地および発行者名を記載する必要はない．ただし，同一の雑誌タイトルが複数あるなどの理由から誤解を生じかねない場合に限り，雑誌名の直後に発行者名を付すことができる．

  （例）谷沢淳三 1987「インド文法学派における否定の意味論——*Pāṇini-sūtra* II-2-6 をめぐって——」『仏教文化』（東京大学仏教青年会）17: 69–91.
- 出版社名末尾の「～社」「～出版社／出版会／出版局／出版部」「～書店」「～書房」等は省略せずに明記する．
- 出版社名冒頭の“The”は省略することができる．また，「株式会社」「有限会社」“Inc.”，“Ltd.”，“S.A.”，“Co.”，“& Co.”，“Publishing Co.”，“GmbH”等も省略が可能である．
- 欧文書籍等における共同出版の場合は，最初の出版地ならびに出版社を記載すればよい．すべて明記する必要がある場合には，原則として〈（出版地 1）:（出版社 1）;（出版地 2）:（出版社 2）〉と記述する．
- 再版された書誌を参照する場合は，初版等他の版の出版社や出版年ではなく，実際に参照した当該書誌の情報を記述する．別途，初版の出版年を記述する必要がある場合，横組論文においてはパーレン内に入れて当該書誌の出版年の前に置く．

  （例）山口益・野沢静証（1953）2011『世親唯識の原典解明』法藏館．
- 和暦表記はすべて西暦に変更する．ただし，書名等に含まれる場合を除く．
- 「年」の語は不要である．
- 複数年にわたって刊行された書籍等の出版年については，ダーシないし二分ダーシを用いて省略せずに記載する．

  （例）× 1985–86　○ 1985–1986
- 出版が確定している未刊の書籍・論文については，和文論文においては「予定」，欧文論文においては“forthcoming”と表記する．なお，雑誌の場合には巻号，書籍の場合には書名，編者名，出版地（洋書の場合），出版社等当該時点で判明している限りの情報を記載するものとする．

  （例）Family Name, First Name. “Article Title.” *Journal Name* 39 (forthcoming).

その他

- 雑誌の巻号について，巻号表記（第○巻第○号）と通巻表記の両者が見受けられる場合，原則として巻号表記のみを記載する．
- 横組み論文および欧文論文では頁数を必ず記載する．なお，頁数を記載する際には重複する位も省略せずに表記するものとする．

（例）× 131–8　○ 131–138

- 学位論文を参照する場合には，提出大学と提出年を記述する．

  （例）Kawamura, Leslie S. 1975. “Vinītadeva’s Contribution to the Buddhist Mentalistic Trend.” PhD diss., University of Saskatchewan. http://hdl.handle.net/10388/etd-10152009-092342.

- インターネット上の資料を用いた場合には，必ず URL を記載する．また，資料の種別に応じてアクセスした年月日も記載する．

  （例）Blumenthal, James. 2014. “Śāntarakṣita.” In *Stanford Encyclopedia of Philosophy*. Stanford University, 1997–. Accessed July 14, 2015. http://plato.stanford.edu/entries/saantarak-sita.

- doi（digital object identifiers）が付されている資料を参照した場合は，それを記載することが望ましい．

  （例）Gonda, J. 1957. “The Vedic Concept of *Aṃhas*.” *Indo-Iranian Journal* 1: 33–60. doi:10.1007/BF00162650.

実例——注および二次文献一覧——

【和文縦組み】

- 二次文献のフル情報は末尾の一覧に掲げる以上，注で二次文献に言及する際には最低限の情報でもよい．なお，その場合の注記は Author-Date 方式（著者名と出版〈刊行〉年を並べる書式）としてもよい．その際，出版年と頁数は読点で結ぶものとする．
- 数字は原則として漢数字を用いる．連続する数はダーシで結び，省略せずに記述するものとする．
- 和漢雑誌の巻号表記については，原資料に従って「第〇〇巻第〇号」「〇巻〇輯」などとし，「第」「巻」「号」等も記載する．漢数字の単位語は不要である．
- 和漢論文・書籍の頁数を記述する場合は，全角漢数字（単位語なし）を全角ダーシで結び末尾に「頁」とする．

（和文縦組み実例）

〈参考文献〉

安藤俊雄『天台学――根本思想とその展開――』平楽寺書店，一九六八
高崎直道「『楞伽経』の外教説――提婆造『外道小乗涅槃論』との関連――」『雲井昭善博士古稀記念 仏教と異宗教』平楽寺書店，一九八五
高崎直道「『大乗起信論』の「真如」」『仏教学』第二九号，一九九〇
水野弘元「部派仏教と法華経の交渉」坂本幸男編『法華経の思想と文化』法華経研究 I，平楽寺書店，一九六五
宮本正尊「仏の誓願と因と縁の生成原理」『印度学仏教学研究』第一一巻第二号，一九七三

【和文横組み】

- 原則的に Author-Date 方式で記述し，書式は欧文論文に従う．
- 『や「のある場合は区切りと考えて句読点を打たないものとする．
- 巻号表記については，巻 (号) の形式とする．

（和文横組み実例）

1）静谷 1954 参照．なお，山田 1959，宇野 1966，Marui 2013 も参照のこと．

2）梶山（1984, 131–139）がすでに指摘しているように，…

〈参考文献〉

Marui Hiroshi. 2013. “The Structure of the Whole Discussion on *śabda* in the *Nyāyamañjarī*.”『印度学仏教学研究』61 (3): 1093–1102.

宇野惇 1966「ジャイナ教の我論」中村元編『自我と無我――インド思想と仏教の根本問題――』平楽寺書店，227–258.

梶山雄一 1984「仏教知識論の形成」平川彰・高崎直道・梶山雄一編『講座大乗仏教 9 認識論と論理学』春秋社，1–101.

静谷正雄 1954「法師（dharmabhāṇaka）について――初期大乗経典の作者に関する試論――」『印度学仏教学研究』3 (1): 131–132.

山田龍城 1959『大乗仏教成立論序説』平楽寺書店．

【欧文】

- 欧文論文の基準は *The Chicago Manual of Style*, 16th ed. (Chicago: The University of Chicago Press, 2010) に基づく．
- Author-Date 方式で記述する．
- 雑誌の巻号における vol.や no. およびそれに相当する語句の記述は原則として省略する．

- 出版地として「東京」「京都」「大阪」という記述を記載する場合はそれぞれ“Tokyo”, “Kyoto”, “Osaka”と表記し，“Tōkyō”, “Kyōto”, “Ōsaka”とする必要はない.

（欧文実例）

1) See Kamimura 1984; Nakamura 1981, 111–115; 2002, 34–39.

2) As Halbfass (1981, 199–201) has pointed out, ... See also Varadachari 1970; Woods 1914.

3) Tanaka and Sashida (1966) translated . . . .

〈Bibliography〉

Halbfass, Wilhelm. 1981. *India and Europe: An Essay in Understanding*. Albany: State University of New York Press. Originally published as *Indien und Europa: Perspektiven ihrer geistigen Begegnung* (Basel: Schwabe, 1981).

Kamimura Katsuhiko 上村勝彦. 1984. “*Arutashāsutora* ni okeru supai katsudō (jō)” 『アルタシャーストラ』におけるスパイ活動 (上). *Tōyō gakujutsu kenkyū* 東洋学術研究 23 (2): 163–182.

Kimura Taiken 木村泰賢. 1930. “Yōgasūtora ni oyoboseru Bukkyō no eikyō: Toku ni sanze jitsuu-ron o shu to shite” 瑜伽経に及ぼせる仏教の影響: 特に三世実有論を主として. In *Shūkyōgaku ronshū* 宗教学論集, ed. Tōkyō Teikoku Daigaku Shūkyōgaku Kōza Sōsetsu Nijūgonen Kinenkai 東京帝国大学宗教学講座創設廿五年記念会, 343–380. Tokyo: Dōbunkan.

Nakamura Hajime 中村元. 1981. “Yōga to gōrishugi-teki shii”ヨーガと合理主義的思惟. In *Furuta Shōkin hakushi koki kinen ronshū: Bukkyō no rekishiteki tenkai ni miru shokeitai* 古田紹欽博士古稀記念論集: 仏教の歴史的展開に見る諸形態, 107–126. Tokyo: Sōbunsha.

———. 2002. *Burafuma-sūtora no tetsugaku* ブラフマ・スートラの哲学. Indo tetsugaku shisō インド哲学思想 2. Tokyo: Iwanami Shoten. First published 1951.

Tanaka Otoya 田中於菟弥, and Sashida Seigō 指田清剛, trans. 1966. *Jūōji monogatari* 十王子物語. Tōyō Bunko 東洋文庫 63. Tokyo: Heibonsha.

Varadachari, V. 1970. “On the Interpretation of a Kārikā of Īśvara Kṛṣṇa.” In *Umesha Mishra Commemoration Volume*, ed. B. R. Saksena et al., 81–85. Allahabad: Ganganatha Jha Research Institute.

Woods, James Haughton. 1914. *The Yoga-System of Patañjali, or the Ancient Hindu Doctrine of Concentration of Mind*. Harvard Oriental Series, vol. 17. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.

補遺 1——叢書類表記——

次に示す叢書類の略号は，特に断りなく用いてもよいものとし，書誌情報は省略可とする．なお，叢書類は必ずしも略号を用いる必要はない．なお，パーリ文献については *A Critical Pāli Dictionary* を基準とする．

〈叢書類略号表〉

C	チョネ版チベット大蔵経
D	デルゲ版チベット大蔵経
N	ナルタン版チベット大蔵経
T	大正新脩大蔵経（高楠順次郎編，全 100 巻，大正一切経刊行会，1924–1932） ※縦組みでは “T” を用いずに「大正」とする．
P	北京版チベット大蔵経
Q	北京版チベット大蔵経（乾隆帝開板）
X	卍続蔵経（全 150 冊，新文豊出版，1976）
恵全	(1) 恵心僧都全集（獅子王圓純編，全 4 巻，恵心僧都九百年遠忌事務所，1916） (2) 恵心僧都全集（比叡山専修院・叡山学院編，全 5 巻，比叡山図書刊行所，1927–1928）〈複製〉思文閣出版，1971
弘全	弘法大師全集（密教文化研究所編纂，増補三版，全 8 巻，密教文化研究所，1965–1968）
宗全	日蓮宗宗学全書（全 18 巻，日蓮宗宗学全書，1921–1926．立正大学日蓮教学研究所編，全 23 巻，山喜房仏書林，1959–1962）
縮蔵	大日本校訂大蔵経（全 40 帙 419 冊，弘教書院，1881–1885）
浄全	浄土宗全書（浄土宗宗典刊行会編，全 20 巻，1907–1914）
昭法全	昭和新修法然上人全集（石井教道編，浄土宗務所，1955）
真全	真言宗全書（全 44 巻，真言宗全書刊行会，1933–1939）
新纂続蔵	新纂大日本続蔵経（全 90 巻，国書刊行会，1975–1989）
真宗全	真宗全書（妻木直良編，正編 46 巻，続編 28 巻，蔵経書院，1913–1916） 〈再版〉国書刊行会，1974–1977
真聖全	真宗聖教全書（真宗聖教全書編纂所編，興教書院，全 5 巻，1940） 〈復刻・再版〉大八木興文堂，1941–1967，1989–1995
真叢	真宗叢書（真宗叢書編輯所編，全 13 巻，前田是山両和上古稀記念会，1927–

1930）〈複製〉臨川書店, 1966–1976

真大　真宗大系（真宗典籍刊行会編輯兼発行, 全 37 巻, 1917–1925）
〈再版〉国書刊行会, 1974–1977

新版日蔵　増補改訂日本大蔵経（鈴木学術財団編, 全 100 巻, 鈴木学術財団, 講談社（発売）, 1973–1978）

西全　西山全書（浄土宗西山派宗務院編纂, 全 8 巻, 浄土宗西山派宗務院, 1913–1922. 別巻 3 冊, 西山専門学校出版部, 文栄堂書店（発売）, 1935–1936. 全 12 巻〈含別巻 4〉, 文栄堂書店, 1973–1975）

西叢　西山叢書（西山短期大学編, 全 5 巻, 西山短期大学, 1990–1996）

続浄全　浄土宗全書（続篇）（全 19 巻, 浄土宗開宗八百年記念慶讃準備局, 山喜房佛書林（発売）, 1972–1974）

続真全　続真言宗全書（続真言宗全書刊行会編纂・発行, 全 42 巻, 1975–1988）

続真大　続真宗大系（安井廣度編集主任, 全 24 巻〈含別巻〉, 真宗典籍刊行会, 1936–1944）〈再版〉国書刊行会, 1974–1977

続蔵　(1) 大日本続蔵経（全 150 套, 蔵経書院, 1905–1912）
(2) 卍続蔵経（全 150 冊, 新文豊出版, 1976）

続曹全　続曹洞宗全書（曹洞宗全書刊行会編, 全 10 巻, 曹洞宗全書刊行会, 1973–1976）

続天全　続天台宗全書（天台宗典編纂所編, 春秋社, 1987–）

続豊全　続豊山全書（勝又俊教編輯, 全 21 巻, 続豊山全書刊行会、1973–1978）

曹全　曹洞宗全書（曹洞宗全書刊行会編, 全 20 巻, 曹洞宗全書刊行会, 1929–1938）
〈覆刻〉1970–1973

大正　大正新脩大蔵経

智全　智山全書（全 22 巻〈含索引・解題〉, 智山全書刊行会, 1964–1969）

定遺（昭定）　昭和定本日蓮聖人遺文（立正大学宗学研究所編, 全 4 巻, 身延久遠寺, 1952–1959）

定親全　定本親鸞聖人全集（親鸞聖人全集刊行会編, 全 9 巻, 法蔵館, 1969–1970）

定本弘全　定本弘法大師全集（密教文化研究所弘法大師著作研究会編, 全 11 巻, 高野山大学密教文化研究所, 1991–1997）

天全　天台宗全書（天台宗典刊行会編, 全 25 巻, 天台宗典刊行会事務所, 大蔵出版, 1935–1937）〈複製〉第一書房, 1973

伝全　伝教大師全集（天台宗宗典刊行会編, 全 5 巻, 天台宗宗典刊行会, 1912）
〈新版〉比叡山専修院附属叡山学院編, 日本仏書刊行会, 1966–1968
〈複製〉世界聖典刊行協会, 1989

日蔵　日本大蔵経（日本大蔵経編纂会編, 全 51 巻, 日本大蔵経編纂会, 1914–1922）

日蓮全　日蓮宗全書（日蓮宗全書出版会編, 全 26 巻, 須原屋書店, 1910–1916）

豊全　豊山全書（田中海応・岡田契昌編輯，全 20 巻，豊山全書刊行会，1937–1939）

仏全　大日本仏教全書（仏書刊行会編，本巻 151 巻，別巻 10 巻，目録 1 巻，大日本仏教全書刊行会，1912–1922）
〈新版〉鈴木学術財団編，全 100 巻，鈴木学術財団，講談社（発売），1973

法伝全　法然上人伝全集（井川定慶集解，稲葉健次，法然上人伝全集刊行会（発売），1952）〈増補再版〉井川定慶，1967 〈3 版〉法然上人伝全集刊行会，1978

卍字蔵　大日本校訂訓点大蔵経（全 36 套 347 冊，蔵経書院，濵田篤三郎，図書出版，1902–1905）

補遺 2——ローマ字表記法——

〈総則〉

・日本語ローマ字表記は，いわゆる修正ヘボン式（modified Hepburn system）を用いる[3].

・中国語ローマ字表記は，漢語ピンインを用いることとする[4]．なお，声調符号を付す必要はない.

・朝鮮語ローマ字表記は，原則としてマッキューン・ライシャワー方式に準拠する[5].

・日本語や中国語等のローマ字表記は，意味単位で分書する.

・固有名詞およびそれに類する語の冒頭は大文字で始め，分書によって後続するものは固有名詞を除いて小文字とする．ただし，書名・雑誌名はセンテンス方式とする.

（例）*Da Amituo jing*　大阿弥陀経

（例）*Guan Wuliangshou jing shu*　観無量寿経疏

（例）*Shi Moheyan lun*　釈摩訶衍論

・漢訳仏典は原則として漢語ピンイン（拼音）で表記するが，日本語論文タイトル内の漢訳仏典，中国・高麗撰述仏典等については，日本語の読み方を記述する.

（例）Yūki Reimon　結城令聞. 1976. “Kegon gokyōshō ni kansuru Nihon, Kōrai ryōdenshō e no ronpyō”　華厳五教章に関する日本・高麗両伝承への論評. *Indogaku Bukkyōgaku kenkyū*　印度学仏教学研究　24 (2): 9–16.

〈日本語ローマ字表記法細則〉

・以下のローマ字表記には特に注意を要する.

し shi　じ ji　ち chi　つ tsu　ふ fu

---

[3] 『新英和大辞典』（第 5 版，研究社，2003）に準拠する.

[4] 原則として「漢語拼音方案」（1958 年）に準拠する.

[5] G. M. McCune and E. O. Reischauer, “The Romanization of the Korean Language: Based Upon Its Phonetic Structure,” *Transactions of the Korea Branch of the Royal Asiatic Society* 29 (1939) 参照.

しゃ sha　しゅ shu　しょ sho　ちゃ cha　ちゅ chu　ちょ cho

・長音記号はマクロン（¯）を用いる．

（例）sokushin jōbutsu 即身成仏

・撥音「ん」は唇音が後続する場合であっても常に“n”と表記する．

（例）nenbutsu　bonbu

・「を」は“wo”ではなく“o”と表記する．

・格助詞「へ」は“e”と表記する．

・促音は子音を重ねる．ただし，ch の前では“t”と表記する．

（例）Nitchō 日澄

・母音および y が後続する n の後にはアポストロフィー（’）を付す．

（例）san’in busshō 三因仏性

（例）Kan’yaku 漢訳

・慣習的に「の」を入れて読む語は分書する．

（例）Ono no Takamura 小野篁

（例）Fujiwara no Michitsuna no haha 藤原道綱母

・称号類は固有名詞に付されている場合も小文字とする．

（例）Momozono tennō 桃園天皇

・次に挙げるような語が熟語を形成せず，独立性が高いと考えられる場合はハイフンを付すことが望ましい．ただし，二次熟語の場合を除く．

「～派」　（例）Chūgan-ha 中観派

「～論」　（例）busshin-ron 仏身論

・論文名等原題に「　」，〈　〉，《　》，『　』（著作以外）等の括弧類が用いられている場合は，一律で“　”に書き換える．ただし，（　）の場合を除く．

・中黒（・）は内容に応じてコンマないしハイフンないしスペースとする．

（例）Kajiyama Yūichi 梶山雄一. 1963. “Shōben, Anne, Gohō” 清弁・安慧・護法. *Mikkyō bunka* 密教文化 64/65: 159–144.

（例）Kanakura Enshō 金倉円照. 1952. “Yōga-sūtora no ningenzō” ヨーガ・スートラの人間像. *Tōhoku Daigaku Bungakubu kenkyū nenpō* 東北大学文学部研究年報 3: 172–205.

（例）Inazu Kizō 稲津紀三. 1953. “Dēvendoranāto Tagōru no shūkyō seikatsu to, Indo shūkyō tetsugakushi-jō ni okeru kare no chii” デーヴェンドラナート・タゴールの宗教生活と、印度宗教哲学史上における彼の地位. *Indogaku Bukkyōgaku kenkyū* 印度学仏教学研究 2 (1): 338–348.